

南方（仏印）

仏印歩兵第八十三連隊

石川県 邑本 衛

陸海軍共に押され気味であったためか、徴集者の半数ぐらいが甲種、第一乙種の現役兵で、八〇パーセントの人たちが現役同様入隊するという状況でした。

私は、石川県石川郡安原村（現金沢市）で、大正十二（一九二三）年三月十一日、農家の次男として生まれました。県立松任農業高校を卒業しましたが、父が農業協同組合長や村長などの公職に就いていました関係で、私は家業である農業の手伝い、農事に従事しておりました。

昭和十八（一九四三）年徴集兵として松任市の国民学校で徴兵検査を受け甲種合格となりました。この当時は、今になって思えば連合軍の攻勢が盛んになり、

昭和十八年十二月十日、東部第九十四部隊、金沢の歩兵第七連隊の本隊は満州ですから、留守部隊に入営しました。その本隊は第二十一師団歩兵第八十三連隊（討第四二三六部隊）です。徴集者全員が、現地から宰領に来た将校・下士官と共に門司に集合したのですが、金沢・富山・松本連隊の初年兵ばかりでした。

当時は既に制空・制海権は連合軍の手中にあり、潜水艦が出没し、空からの銃爆もありました。日本近海すら危険な状況でした。船団は六、七隻で、我々軍人の乗った船は「バナマ丸」という鉱石運搬船を改造した船で、他はタンカーでした。護衛艦に守られなが

ら、なるべく中国大陸の沿岸に沿っての航行ですから舟山列島の付近まで北上し、また沿岸に沿って南下したのでです。

米軍のB25（双発機で、昭和十七年四月、本土初空襲をした機種）二機の爆撃を受けました。敵は、我々軍人の乗っている「パナマ丸」を襲撃したのです。船尾に爆弾を受け、後ろから沈みました。私は幸い船首にいたので助かりました。船首は岩礁に乗り上げたので沈まなかったのです。船尾の方は被害があり、我が連隊の一部が戦没してしまいました。

「パナマ丸」の兵隊は海防艦に助け上げられ、携行兵器、弾薬等はタンカーに移乗したのです。船は高雄港に急航し、高雄港で下船、次の船団を組んで海南島の榆林で待機しました。そして嵐の時を選んで出港したのでです。制海権も制空権もなしの中ですが、幸いに潜水艦からの攻撃や空襲を受けることなく、仏領インドシナのサイゴンに着いたのは三月十日でした。

第一・第三大隊はソーラン上陸、第二大隊はサイゴンに上陸です。南部仏印は比較的平穏でしたが、北部

には在支米空軍機（桂林・柳州・南寧等の飛行場）の攻撃があったといえます。

連隊本部が着いたのはハノイから二〇〇キロ北部のランソンの中間地点で、第八十三連隊の一個大隊と山砲一個大隊が駐屯しました。初年兵はコロロに行き集合教育を受け、我々甲種幹部候補生はインドネシアの幹部候補生隊（予備士官学校）へ昭和十九年九月十日に入校のため、マレー半島を南下しました。シンガポールから機帆船でジャワへ渡り、南方軍の幹部候補生隊で八カ月の教育を受けることになりました。ジャワは勿論、スマトラ、マレー、ビルマ及び仏印（フィリピンはもう輸送が困難であったためか不参であった）の候補生が集合したのです。

教育は、内地では対ソ戦教育が主であったのですが、南方では、特殊地域海岸上陸戦、水際防衛、密林戦、ジャングル戦、ゲリラ戦その他で、夜陰に乗じて敵基地への斬り込み隊その他で、実情に即した対米英戦法を学びました。

久留米、前橋の予備士官学校在校生や、学徒出陣の

学生等も内地から参加し、八百〜九百人であったといわれていました。小・中隊長は消耗が激しいので、内地各地から集めていたのでしょう。ですから、内地の予備士官学校で前期の教育を受け、後期の四カ月を、この候補生隊で受けるのです。大久保歩兵生徒隊長（久留米予備士官学校の教官だった）から、対ソ戦から対米英戦に変えていく戦術の学科の教育も多くありました。しかし、内地からジャワまでの輸送は、台湾、マニラ便ですから、途中海没した候補生も多かったと思われますし、輸送期間も随分長い人もいました。

私は歩兵砲中隊に入り、九二式歩兵砲（大隊砲）、四七ミリ速射砲、四一式山砲の連隊砲の教育を受け、教官の久保田中尉は神戸の人でした。しかし、米軍の砲と比べると口径も小さく、旧式であったようでした。教育の間、戦況もだんだん悪化して来たので、ジャワでの空襲は一、二度ありましたが、たいした被害は無かったようで、我々は、寸暇を惜しんで教育に専念していました。何しろ全国各地から候補生が集

まったのですから、負けられぬという気持ちも内心ありました。

昭和二十年四月二十九日の空襲では、兵器や弾薬を洞窟の中に入れ被害を防ぎましたが、B 25から、反戦ビラが散布されました。内地空襲の写真や、輸送船の海没の写真、厭戦気分をおおる文書もあり、部隊名も書いてあります。スラバヤなどでは現地人が工作員か判らぬがビラを配布しているので、憲兵が走り回り、押収したりしていたといえます。上層部は日本軍の敗退、硫黄島の玉砕、沖繩戦など、大体の戦況は話をされていたので、状況が悪化していることは概ね判っていたようですが、我々候補生には知らされていなかったもので、あくまでも必勝の信念に燃えていました。危機感があったのですが、我々の闘志は燃えていました。

教育総監土肥原賢二大將が候補生隊に視察に来て「軍事教育の最後の教育だ」と激励されました。卒業は、昭和二十年五月十日で、各々は原隊に帰りました。ビルマの生徒は、ビルマ方面軍が撤退していたの

でラングーンへ集結しました。私たちがジャワからマレーへ北上してサイゴンへ着いたのは七月の終わりでした。途中の鉄橋はほとんど落ちていたので、ガソリン、石油を貨車から降ろす使役に出、我々見習士官も手伝いました。昼は空襲があり、油を退避し、夜、発車するときに積む、という昼夜の作業をしながら、油や糧秣をバンコックの貨物廠に収めるのです。

サイゴンでは一週間ほど滞留させられ、ブーゲンビルの島のブインに着いたのは八月十五日、本部へ着いたのは八月十六日でした。それでも、我々は早く、後続の者は一週間も遅れたのです。連隊無線が微弱のため発信にならないため、トラックに便乗して、ラオスの大隊本部へ申告に行きました。

話を少し戻しますが、八月十五日午後、サイゴンよりブインに到着、停車場司令部の第十中隊の山岸少尉殿より「本日はポツダム宣言を受諾、天皇陛下の玉音放送があった」と知らされ、半信半疑で連隊本部へ汽車で急行しました。

八月十六日、タンホアの歩兵第八十三連隊本部に到着、第三機関銃中隊付を命ぜられました。連隊本部の営庭で重要書類、典範令等を焼却処分しました。

八月十七日、任地のブイン兵舎に到着、中隊残留隊の上官高僧少尉殿の指揮下で、軍馬の運動と手入れ等を行いました。

八月下旬（日付不詳）陸軍少尉に任ぜられました。九月上旬頃、ラオスから第三大隊主力が集結地ブイン兵舎に到着、同中旬、中国軍により武装解除を受けました。

九月下旬頃、近くのクワロの友軍飛行場跡の仮設兵舎（バラック建て、椰子の葉葺き）に移動を命ぜられ、現地自活として甘藷を作り、また、バレーボールや野球の練習などをして体力・健康管理の一助としました。十月頃、中隊対抗の野球大会（第三大隊大会）を行いました。

十二月に入り、大隊はハイフォン港付近の元フランス軍兵舎に移動し、野菜等作り現地自活をしていました。

二十一年の新年を同地で迎え、僅かな正月料理で新年を祝いました。

二月頃、大隊で各中隊が演芸班を作り、演芸大会を盛んに行い、敗戦、抑留という鬱々たる環境の中、しかも望郷の念にかられている時であり、隊の上下を問わず、ひとときの楽しさを味わうことができました。

四月上旬、大隊はハイフォン港の倉庫に移動、帰国のため乗船待機しました。

四月十五日頃、連隊全員、復員船リバティ型貨物船に乗船、ハイフォン港を出港一路内地に向かいました。四月二十五日頃、神奈川県浦賀港沖に到着、検疫の結果、コレラ菌保持者が出たため、一週間程上陸を延期されました。

四月二十九日、船上甲板に連隊全員集合し、天長節の拝賀を行い、遠く皇居の方を遙拝しました。

五月十一日頃、久里浜に上陸、全員DDTで身体を消毒、横須賀の元重砲兵隊兵舎まで行進し、二日ほど宿泊、復員業務、復員式等を行い連隊解散、復員となり、それぞれ各県毎に臨時列車に乗車、五月五日、金

沢駅着、我が家に徒歩で帰りました。家族の出迎えがあり感無量でした。

思えば、仏領インドシナは比較的平穩のうちに仏軍を降伏させておりましたが、戦局悪化にともない、明号作戦を発起したのですが、その主力は、我が第二十一師団討部隊でした。

降伏後は、仏印軍の力では治安が治められず、特に日本軍の兵補であった独立派の軍が仏軍に対抗する等、ことがあり、我々日本軍が、かつての友軍を、仏軍の命令で討伐するようなことになり、戦後、ベトナム戦争の口火が切られるという悲しい結果ともなり、また日本軍人の中には現地に留まって、独立運動に協力した人もおりました。

また、抑留についても、南部は英・仏軍の管理下のため、苦勞したり、戦争犯罪人の摘発もありました。第二十一師団参謀長は最高責任者として二十五年の禁固刑を申し渡されましたが、後に減刑・恩赦となったといえます。

北部の部隊は中国軍管理下となったためか、武装解

除は穏便に行われ、戦争犯罪人もあまり出なかったようですが、フランスの民間人を切った容疑者の下士官が、南部へ連れて行かれ、シンガポールで裁判になったという話を後に聞きました。

仏印、マレー炎熱下

重労働・飢餓克服

長野県 唐澤 甲子雄

私は大正十三（一九二四）年長野県に生まれました。軍歴を申し上げますと、昭和十八年春、歩兵第五十連隊留守隊入営。七月、本隊第二十一師団歩兵第六十二連隊駐屯地仏領インドシナハノイ北方ヴァンエンに到着しました。

昭和十九（一九四四）年下士官志願、十月任官。戦局悪化の中、幹部候補生、下士官候補生、マレー人兵補志願兵の教育助教。シンガポール決戦準備、対潜水艦監視哨長。その間三度命拾いをし終戦となりまし

た。昭和二十一年五月田辺上陸復員しました。

私は男兄弟七人の三男で、兄貴は国策に従い満州へ行っていました。次兄は私が帰って来たら戦死していたのですが、海軍へ行っていました。私の場合もやはり大陸へという勇ましい気持ちも大分あった訳ですが、どうしても母に泣き付かれて「お前さん一人ぐらいは近くにおいて欲しい」ということで、東京の軍需工場に行ったのですが、たまたま一年足らずで、すぐ帰れという電報を貰い、夜学の本など半分揃えた段階で、一切を諦めて家へ帰って来ました。そして這いつくばいながら田の草取りをやっている親父の手伝いをしているうちに「徴用令書」というはがき一枚が飛び込んできました。

伊那町で身体検査をやるから出て来いということ、兵隊検査と同じように裸にされました。背中をポンポンと叩かれて「合格」となりました。その時に私は今頼まなければどうしようもないぞと、大きな声で「お願いがございませう。私にはまだ下に弟三人がおり